愛媛大学教育学部紀要　人文・社会科学　第34巻　第1号　83～101　2001

イェケ・モンゴル・ウルスのアウルク

矢　澤　知　行
（東洋史学研究室）

1．はじめに
2．イェケ・モンゴル・ウルスの軍制
3．『元朝秘史』記載のアウルク
4．『集史』記載のアウルク
5．おわりに

1．はじめに

一次史料がきわめて限られているという事情もあって，13世紀モンゴル時代の軍制機構には未解明の点が多い。それらを明らかにするためには，従来の漢文史料だけでなく，中世モンゴル語の漢字音転写として残存する『元朝秘史』や，比較的豊富なペルシア語文献なども参照して，複数の角度から光を当てることが求められる。イェケ・モンゴル・ウルス Yeke Mongol Ulus 時代の立体的な歴史像を浮かび上がらせるには，中国からの視点に偏った漢文史料だけでなく，モンゴル時代ならではの多言語史料を活用しなければならないのである。

本稿では，大元ウルスにおける主要な兵站政策“奥魯”の原型にあたる兵站組織“アウルク a'uruq”について，『元朝秘史』とラシード・アッディーン Rashīd al-Dīn の『集史（*Jāmi' al-Tavārīkh*）』を手掛かりにして再検討を行う。

アウルクおよび奥魯については，岩村忍氏・村上正二氏・蓮見節氏らによってその実態の解明が試みられてきた[1]。三氏のアウルクに対する見解は，軍人の補充や物資の補給のための後方の輜重・兵站陣営を指すという点でおおよそ一致している。その語義に関しては，“アウルク（a'uruq < aγruq, oγruq）は後方陣営（camp à l'arrière）に比定される”とするペリオ説[2]が承認されており，原義については“あらゆるものを保存する貯蔵所・倉庫（аливаа юмыг агуулах амбаар склад）”とするダムディンスレン説[3]が提出されている。また，これらの研究を継承して，アウルクから奥魯制にいたる展開の過程を明らかにした拙稿もある[4]。

上掲の先行研究のうち，多言語史料を駆使してアウルクの研究を行ったのは，唯一，蓮見氏の

---

1 岩村 1942，岩村 1968，村上 1993/1943，蓮見 1985，蓮見 1987a，賈 1988.
2 Pelliot 1930，p.259.
3 Дамдинсүрэн 1975，pp.14－16.
4 矢澤 1996.

みである。氏は，ラシード・アッディーン『集史』に見えるフラグ西征記事のほか，『元朝秘史』，彭大雅・徐霆[撰]『黒韃事略』，趙珙『蒙韃備録』等，モンゴル時代初期にかかわる史料に依拠し，モンゴル軍の遠征・戦闘時におけるアウルクの「移動」に焦点を当て，その多様性に目を配りながら精細な分析を行った。

蓮見氏が明らかにしたのは，アウルクの原点が移動する遊牧集団であり，その機能や内容・性格・大きさに多様性が見られるのは，遊牧民の移動に牧畜的移動や軍事的移動などさまざまな理由や様式があり，それがアウルクに反映されたという点であった[5]。この結論は，岩村氏の見解，すなわちアウルクをヌトゥクの集団から発展したものとする岩村氏の説[6]を飛躍発展させたものといえる。

また，蓮見氏は，“モンゴル軍が遠征軍を組織するにあたり，…モンゴル軍の一軍団内部において qol, alginči, a'uruq という区分が行なわれていたことも若干の史料から明らかである。これらはそれぞれ中軍・先鋒軍・後軍（輜重軍）と見なすことができる[7]”と述べ，モンゴル軍における「縦の区分」の存在を主張した。これは，一般的によく知られている「横の区分」――すなわち中軍・左翼軍・右翼軍の三つに分かれて作戦を展開するもの――と併存しながら，遠征や戦闘の場面において機能したものである。本稿で考察するアウルクとは，この「縦の区分」における後軍（輜重軍）にほかならない。

蓮見氏の研究を参照すると，アウルクの形態という点においては，ほぼ論じ尽くされた感がある。しかし，氏は，ラシード『集史』や『元朝秘史』の史料を網羅的に参照したわけではなく，また，「移動」とは別の視点から考察を進めれば，これまで触れられなかったアウルクの特質を見出す余地もあろう。

そこで本稿では，まず，イェケ・モンゴル・ウルスの軍制史研究の課題を示し，その上で，モンゴル時代初期の兵站陣営にあたるアウルクについて考察することにより，奥魯に代表される大元ウルスの兵站政策の特質を理解するための礎石としたい。

2．イェケ・モンゴル・ウルスの軍制

志茂碩敏氏は，ラシード『集史』などペルシア語史料を駆使した「イル汗国」（以下，フレグ・ウルス）史研究を通じてモンゴル・ウルスの基本構造の解明をめざした[8]。氏は，モンゴル・ウルスが“遊牧部族連合国家”であるという点において，匈奴以来の一連の遊牧政権と全く同一のものであると結論した。また，フレグ・ウルスの全時代を通じて政権の中核を占めたのは，チンギス・カン時代のモンゴル部将“nökör[9]”たちの後裔であり，彼らはイランにおいて“amīr-i buzurg”や“nūkar”などと称され，チンギス・カンの権力形成期以来，その基本的な国家構造

---

5 蓮見 1987a, p.47. なお，モンゴルにおける牧畜的移動とアウルクの関わりについては，例えばオトルロフ otorlaqu の形式［吉田 1982, pp.335－337；吉田 1984, pp.23－24］との比較などを通じて，より具体的に分析しなければならない。

6 岩村 1968, p.251.

7 蓮見 1985, pp.2－3. なお，蓮見氏の「縦の区分」説の詳細については，［蓮見 1990］を参照。

8 志茂碩敏 1995.

9 護雅夫氏は，チンギス・カンと“nökör”の結びつきが，モンゴル・ウルス勃興期，権力形成期の国家構造の基盤を成していたことを論じた。護 1952a, 護 1952b.

が維持され続けたことを明らかにしたのである。

志茂氏によって解明されたのが遊牧国家の上部における政治・軍事の構造だとすれば，いかにして牧民たちを組織し，一定の秩序を形成したのかという，下部の政治・軍事構造を明らかにすることも必要であろう。

従来，イェケ・モンゴル・ウルスの軍制は，ウルスの根幹を成す牧民による軍事組織“千戸制”に関する研究と，カンの侍衛軍団“ケシク”に関する研究，この両者が基軸となってきた。とくに前者，すなわち政治軍事組織としての“千戸制”の内部構造を理解することは，そうした下部構造に関わる問題を多分に含む重要な課題である。

いわゆる“千戸制[10]”については，村上正二氏，本田実信氏，杉山正明氏らによる諸研究[11]がみられる。それは，牧民を“千戸・百戸・十戸”等，十進法を基本単位とする大小の政治的・軍事的集団に編成したものであり，匈奴以来の一連の遊牧国家の流れを汲むいわば伝統的な軍制であった。平時，牧民たちはそれぞれの集団の長ノヤン noyan[12]の管理下で遊牧や狩猟を主とする生産活動に従事し，戦時には，「十五才以上，七十才以下」の男子をことごとく僉して兵士としたといわれる。

ここで問題としたいのは，戦時における「兵牧一致」の体制，すなわち，牧民の男子はすべて戦士でもあり，いったん戦争が起これば全牧民を挙げて戦闘に赴いた，という通念である。モンゴルにおける徴兵制が，実際に完全な皆兵制度であったかどうかについては，慎重な検討が必要である[13]。遊牧集団内において必ずしも戦闘に参加することが許されなかった隷属民の存在や，戦闘の際にけっして欠くことのできない兵站供給の機能を誰が担ったかという問題もあわせて考慮すると，従来の単純な理解では括りきれない多様な視点が求められるのである。

さて，一方，カンの侍衛集団“ケシク”については，箭内亙氏，片山共夫氏らによる研究[14]の

---

10 “千戸制”に関する考察の過程で，「戸」の概念が遊牧国家と農耕国家とでは異なるという理解のもとに，むしろ“千人隊”と称するべきだという主張もある。これは，イェケ・モンゴル・ウルスの国家構造の根幹の部分に関わる重要な指摘であり，場合によっては，従来の理解を大幅に描き改めなければならない可能性も示唆する。例えば，ペルシア語史料における“千戸”は“hazāra”すなわち「千」という数そのものであり，それが指し示すのも人数や戸数などさまざまなケースが考えられる。漢文史料に表される“千戸”についても，それが必ずしも中国における常識的な「戸」を単位とするものとはかぎらない。つまり，“千戸”と“hazāra”と“千人隊”の三者の実体は同じなのか，または異なるのか。異なるとすれば相違点は何か。こうした問いに対し実証的考察をもって示すのは今後の課題である。本稿では，さしあたり漢文史料上の表現である“千戸・百戸・十戸”等を用いておいた。なお，これらの十進法の数が定住社会における行政的な地域単位として定着していったケースも中央アジアなどでは見られる［加藤 1990］。

11 村上 1993/1951，本田1991/1953，本田1991/1961，杉山 1978，野上 1971.

12 小澤重男氏が「長官」と訳するところの“ノヤン noyan”については，“ハラン haran”（現代モンゴル語の ард“人民”がそれにあたる）との関係を分析する必要がある。蓮見節氏は，『元代白話碑集録』［蔡 1955］にみられる漢語とモンゴル語の碑文を対照して，“軍官”と“軍人”が，それぞれモンゴル語の“ノヤン”と“ハラン”に対応していることを見出した［蓮見 1987b，p. 14］。両者の関係は，モンゴル社会内における新たな階層形成の実態に深く関わる問題であり，その解明は今後の課題である。

13 村上氏も次のように述べて，遊牧民の皆兵論に慎重な態度を示している。“遊牧民族においては職業的戦士は存在せず悉くが兵士であったという一般的表現は，誤りではないにしても甚だ粗雑なものであると謂わねばなるまい。正しくは寧ろ遊牧民族においてはいずれの戸も軍戸として直接間接に軍務に服役するように組織されていたと言うに止めるべきである［村上 1993/1943，p. 112］。”

14 箭内1930/1916a，片山 1977，片山 1980a，片山 1980b，片山 1982，片山 1987a，片山 1987b，真杉 1970，大葉 1980.

結果，その概要が明らかにされた。チンギス・カンが権力を確立していく過程において，モンゴルの諸部を統制し，カンとそのオルドの安全を保持する必要から形成されたのが侍衛集団ケシクであった。強大な常備軍としての性格を持つケシクは，カンの命によって，諸部の十戸・百戸・千戸のノヤンたちの子のうち，屈強にして優秀な者が集められて成立したものである。ただ，そこには未成年の男子も数多く属し，戦域の拡大に伴って兵士の需要が急激に増してくると，それに対応するためにいわゆる“漸丁軍”が組織されるケースもあった。つまり，ケシクといってもその内実は多様であり，エリート的な近衛兵団という単純な理解で括ることはできないのである。

イェケ・モンゴル・ウルスの軍隊において，戦時に必要とされる軍需物資は基本的に本人の自弁であったが，ケシクにおける馬匹とその他の装備は，その兵士が属するもとの千戸・百戸内の牧民に対して平均的に割り当てられ，クプチュル qūpchūr（現物税）として徴収された。出征時にも，必要な軍糧は国家によって発給されることはなく，食用の肉類・飲用の馬乳などすべてが兵士とその家族の負担となったのである。つまり，遠征に際しても，兵士は家族や家畜と共に移動するのが普通であったから，普段の遊牧生活の延長として戦争に臨んだものといえる。なお，クプチュルは，戦時に限らず，毎年，各々が属するノヤンを通じて徴収されたが，従軍の度合いや丁数・家畜財産の多寡によってその負担に差があったのか等については，いまだに解明されていない点が多い。チンギス・カンの時期において，牧民内部の階層分化がどれほど進行していたのかという問題とあわせて考察していく必要があろう。

以上に示したように，イェケ・モンゴル・ウルスの軍制については，従来の単純化された視点を乗り越えて，さまざまな角度から再検討することが求められている。なかでも「下部構造」の解明は特に重要な課題といえよう。それにかかわって，以下，アウルクに関するさらなる考察を試みていきたい。その際に手がかりとするのは，ウルス初期の状況を比較的詳しく記している二つの史料――『元朝秘史』とラシード『集史』――である。両史料を網羅的にあたった上で，中国本土に進出する以前のイェケ・モンゴル・ウルスの軍制，とくにその兵站政策がどのように機能していたかという問題について考察する。

3.『元朝秘史』記載のアウルク

遊牧民の戦いにおいては，戦場に向かうときには老人や婦女子も含めた全家族を挙げて移動し，戦闘員と非戦闘員を区別することはなかったといわれる。もちろん戦闘の場面では壮丁を中心に戦隊が組織されたが，老人や婦女子なども後方の輜重陣営アウルクを基地とする兵站活動に携わっていた。

本章では，『元朝秘史』[15]における断片的な記載をもとに，イェケ・モンゴル・ウルスの兵站活動が実際にどのような形で行われていたかを考察する。チンギス・カンの伝記であり，彼の勝利への道程を文学性豊かに表現する記録する『元朝秘史』だが，そこにみられる戦闘の具体的な描写はけっして多くない。兵站活動のあり方を示唆する記述もごく限られた数箇所に散見されるだけであり，それは，兵士や軍糧の調達がどのように機能していたかを示していたり，あるいは実

15 『元朝秘史』の原文は，[額尔登泰 1980] に拠った。訳出にあたっては次の諸文献を参考にした。小澤 1986，小澤 1988，小澤 1989，小澤 1997，村上 1970，村上 1972，村上 1976，岩村 1963.

際にアウルクの名称を用いてその状況を描写したものである。

まず,『元朝秘史』巻4・第144節に次のような記述がある。(引用史料中の［　］内は訳者が補った部分,（　）内は原語または説明。以下同様。)

> チンギス・カン（成吉思(中)合罕, Činggis qahan）はオノン河に向けて，タイチウト族の（泰亦赤兀敦, Taiyiči'ud-un）アウチュ・バアトルを（阿兀出把阿禿(舌)里, A'uču ba'atur-i）追撃した。アウチュ・バアトルは自分の民のところに（兀魯思禿(舌)里顔, ulus-tur-iyan）到り，自分の民をせきたてて移動させてから，アウチュ・バアトル，コドゥン・オルチャン（(中)豁敦敦(舌)児長, Qodun orčang）のタイチウト族は，オノン河の向こう側に残った盾を持った自分の兵士たちを立て直して，“会戦しよう”と言って整え立った。チンギス・カンは［そこに］到って，タイチウト族と戦い合った。非常に繰り返し繰り返し戦い合って，日暮れになって，その戦い合った地に対峙して泊まった。民（兀魯思, ulus）も急いでやってきて，まさにその場所に自分の兵士らと一緒にクリエンを構えて（古(舌)列額列周, küre'eleǰü）共に泊まった。[16]

これは，チンギス・カンとタイチウト族のアウチュ・バアトルとの戦いに関する一節である。アウチュ・バアトルが，戦闘に先だって，“自分の民をせきたてて移動させ”たというのは，戦闘に参加しない彼らを危険な戦場付近から速やかに避難させたということであろう。史料中の“民 ulus”とは，アウチュ・バアトルとともに移動してきた人々，すなわち兵士たちの家族や家畜群にあたり，戦闘の前にいったん彼らと合流したのは，負傷した兵士をそこに留めたり，当座の食糧を補給したりするためだったと想像される。

一方，チンギス・カン側の軍隊においても，日中，チンギス・カンの戦闘部隊がアウチュ・バアトルの軍と戦いを繰り返している間，戦場からやや離れた場所に待機していた民 ulus の存在を窺うことができる。彼らは，日が暮れて戦闘が終わると，すぐに兵士たちに合流してクリエン küriyen[17]（圏営）を構え，一緒に泊まったという。戦闘で疲労・負傷した兵士たちに十分な食事を与え，手厚く介護するためであろう。アウチュ・バアトルとチンギス・カン，いずれの“民 ulus”の集団も，戦闘時は戦闘部隊から離れ，戦闘が終わると合流して兵士の介護・休養や軍糧の調達を行っていたのである。チンギス・カン時代の戦闘における兵站活動はこのような形で行われており，この“民 ulus”の集団こそが後述するアウルクそのものだったと想定できる。

一方,『元朝秘史』巻8・第199節にみえる次の記事は，チンギス・カンが側近のスベエテイに対し，敵を追撃することを命じ，その際の糧食の調達をめぐる助言をした場面である。

> 同じ丑の年（乙丑, 1205），チンギス・カンは勅を下し，スベエテイを（速別額台宜, Sübe'etei-yi），鉄車に乗ったのを，トクトアの（脱黒脱阿因, Toγtoa-yin）クドゥ（(中)忽都, Qudu），ガル（(中)合勒, Gal），チラウン（赤剌温, Čila'un）等の彼の子らを，追撃させ遣わすとき，スベエテイにチンギス・カンの勅を下して言葉を伝えしめた。「…（中略）…また，高い峠を越え，広い河を渡り遣わしたお前を。地の遠いことを考えて，軍の馬どもが痩せな

16 額尔登泰 1980, pp.276－278；小澤 1986, pp.135－141, 村上 1970, pp.315－327.

17 クリエンにはさまざまな形式が見られるが，これは吉田順一氏の述べるように,「駐営形式としてのクリエン」である［吉田 1969, p.58］。また，軍事集団としてのクリエンの構造については,［蓮見 1990］に詳しい。

いうちに慈しめ。自分の糧食（古捏速邊，künesü-ben）が尽きないうちに節約せよ。軍馬が痩せてしまえば，慈しんでも詮ないことだ。糧食が底をついてしまえば，節約しても詮ないことだ。お前たちの進路には獣が多くいるだろう。先を考えて行くときには兵の人を獣のところに駆けさせるな。際限なく巻狩りをするな。『兵の人［のため］に，糧食に，足し，自分の助けになるように』と言って，巻狩りをするなら，限って巻狩りをせよ。限りのある巻狩りより他に，兵の人の鞍の鞦をつけさせるな。馬勒をつけさせないで，口を開けて行くように。…（後略）」[18]

ここには同行する“民 ulus”の集団の姿は確認できない。このように限られた人数で急行して敵を追撃する場合などは，行軍に際して家族や畜群を伴わなうことができなかったのである。したがって，糧食は携帯食に頼り，どうしても必要な時に限って巻狩りなどで補給したのであろう[19]。馬をいたわりながら行軍するようチンギス・カンが繰り返し諭したのも，“民 ulus”や家畜の集団が控えていないために，替え馬や食糧に限りがあるという事情からだろう。こうした特別な場合を除けば，戦闘の場面において兵站供給を担う“民 ulus”の集団はけっして欠くことのできない存在だったと考えられるのである。

さて，『元朝秘史』において，“民 ulus”の集団にあたるアウルクの語が実際に用いられる事例に，どのようなものがあるのだろうか。アウルクは，『元朝秘史』において“阿兀舌魯黒，a'uruγ”またはその複数形“阿兀舌魯兀傷，a'uru'ud”の形で散見され，その傍訳として“老小營”“老營”“營盤”“家”という四種類の漢語が当てられている。そのことはいったい何を意味するのだろうか。

まず，『元朝秘史』巻10・第233節【史料 A】は，チンギス・カンのケブテウル kebte'ül（宿衛兵）の主要な任務を語るなかで，アウルクに関して次のように論及している。

宿衛兵（客卜帖兀勒，kebte'ül）こそ私の黄金の命を守るのだ。鷹狩りをし，巻狩りをして行くとき，共に苦労を分かちあうのだ。オルド（斡舌児朶，ordo）を保たしめられて，移動するとき，平穏なとき，車を面倒見る。私の身を守って泊まることは容易であるか。ゲル（格舌児，ger）・車（帖舌児堅，tergen）・アウルク（阿兀舌魯黒，a'uruγ）が移動するとき，止まるとき，［それらを］面倒見ることは容易であるか。（後略）[20]

ここではアウルクの漢語傍訳として“老小營”という語が与えられている。“老小”とは一般に「家族」の訳語であるから，家族営といったような意味であろう。アウルクはゲルや車と並列に扱われており，それらの安全は，チンギス・カンの身辺警護にあたるケシクのケブテウル kebte'ül（宿衛兵）によって守られていた。ゲル，車，アウルクの三者は，史料中のオルド ordo（宮帳）の具体的な内容を表しており，その中でアウルクはカンの家族集団をさしていたものといえる。チンギス・カンが戦闘時などに移動すると，オルドに属するアウルクもそれに随行して，移動したり停留したりしたのである。

---

18 額尔登泰 1980，pp.523－527；小澤 1988，pp.21－43；村上 1972，pp.316－326.

19 モンゴルの遊牧民が狩猟を通じて食糧を調達することは普通に行われていたが［吉田 1981］，ここでは，追撃の任務に支障が出ないように巻狩りを極力やめさせたと理解すべきだろう。

20 額尔登泰 1980，pp.657－658；小澤 1989，pp.46－57；村上 1976，pp.66－67.

なお，趙珙『蒙韃備録』婦女にみえる次の記述から類推すると，アウルクは，家族や家畜，テント類から生活用品にいたるまで，通常の遊牧生活の状態をそのまま移行して戦闘に赴いた集団だったことがわかる。

> その俗，出師するに，貴賤を以てせず，多く妻孥を帯び，行きて自ら云用し，以て行李・衣服・錢物の類を管す。その婦女は専ら張立せる氈帳を管し，鞍馬・輜重・車馱等の物事を収卸す。

つまり，兵士たちが戦闘に赴くとき，妻たちの管理するアウルクとの連繋さえ保っていれば，食糧や武器などを必要に応じて調達することができたのであり，その意味で，アウルクは，戦闘部隊の後方に位置する輜重陣営としての性格を帯びていたのである。

次に，『元朝秘史』巻4・第136節【史料B】に，

> チンギス・カンのアウルク（阿兀舌魯黒，a'uruγ）はカリルトゥ（(中)合舌澧氵禿，Qariltu）湖にあった。アウルクに（阿兀舌魯兀傷圖舌児，a'uru'ud-tur）残った者を，ジュルキン族（主舌児勤，J̌ürkin）が五十人の人々の衣服を剥ぎ取ってしまった。十人の人々を殺めた。「ジュルキン族にそのようにされました」と言って，我々のアウルクに（阿兀舌魯兀傷圖舌児，a'uru'ud-tur）残ったものが，チンギス・カンに告げると，…（後略）[21]

と三例見られるアウルクは，いずれも漢語の傍訳として“老小営”の語が与えられている。また，後二者のアウルクは“阿兀舌魯兀傷，a'uru'ud”という複数形をとっており，このことは，蓮見氏も指摘する通り[22]，アウルクが複数に分散する場合があったことを想像させる。つまり，移動の可能なアウルクが状況に応じて離合集散の行動をとるケースもあったと考えられるのである。また，ジュルキンの襲撃に遭って殺された十人は，武器を持って立ち向かう戦闘能力があったものとみられ，一方，衣服を剥ぎ取られた五十人は，主としてその他の非戦闘員から成ったものと考えられる。つまり，本来は戦闘部隊ではないアウルクにも，少数ながら戦闘員に類するものが含まれていたことが推測できるのである。

次の例もそうした戦闘員の存在を示すものである。『元朝秘史』巻8・第198節【史料C】に，

> そこからチンギス・カンは戻り，アライ峠を通って（阿舌来亦牙舌児，arai-yiyar）アウルクに（阿兀舌魯兀傷突舌児，a'uru'ud-dur）下営した。チンバイ（沉白，Čimbai）は山頂の砦に立て篭ったメルキト族を（瞭舌児乞的，Merkid-i）殲滅した。そしてメルキト族のことをチンギス・カンは勅するとき，彼らの殺すべきを殺させ，残った者どもを兵士達に分虜させた。また，さきに降伏したメルキト族がアウルクから（阿兀舌魯兀荅察，a'uru'ud-ača）離反し蜂起した。アウルクに（阿兀舌魯兀傷突(舌)児，a'uru'ud-dur）居住する我々の従卒たち（闊脱臣，kötöčin）が彼らを制圧した。[23]

とみられる三例のアウルクは，いずれも複数形をとっており，それぞれ漢語傍訳として“家毎自的”または“家毎”という表現を伴っている。つまり，ここでアウルクは“家”の集合体として

---

21 額尔登泰 1980，pp.246－247；小澤 1986，pp.79－89；村上 1970，pp.297－299.

22 蓮見 1987a，p.43.

23 額尔登泰 1980，pp.521－522；小澤 1988，pp.3－20；村上 1972，pp.307－316.

理解されているのである。

史料の内容を見ると，まず，チンギス・カンがメルキト族を破った後でジャルリク Jarliγ（勅）を下し，生き残った者たちを兵士たちに分け与え，隷属民としたことが分かる。また，かつて降伏し，隷属民となっていたメルキトの民が，アウルクの中から蜂起し，それを同じアウルクに住む従卒 kötöčin が鎮圧したと記されており，このことから，隷属民となった戦争捕虜は通常，アウルク内に置かれていたことや，前掲【史料 B】にもあったように，アウルク内にも戦闘に耐えうる者がおり，それがここでは従卒 kötöčin であったことが判明する。アウルク内にとどめられた隷属民は，おそらく遊牧生産に従事し，それを管理する立場にあったのが従卒 kötöčin だったのであろう。つまり，同じ遊牧集団内で，戦士や従卒，隷属民などが一種の分業体制を築いていたことが想像できる。

つづいて，『元朝秘史』続集巻1・第253節【史料 D】にみえる次の記事では，アウルクに“營盤”すなわち本営を意味する漢語傍訳が付され，それまで見られなかった“大アウルク yeke a'uruγ”という表現が用いられている。

> ［チンギス・カンが］遣わして言うに，「北京城塞に下営せよ。北京城塞を帰服させ，彼方の女真の（主児中扯敦，jürčed-un）ブカヌを（夫中合訥宜，Buqanu-yi）経由して行き，ブカヌが敵対を考えるならば攻撃せよ。彼が帰順するならば周縁の彼らの諸城を経由して，ウラ（浯剌，Ula），ナウ（納浯，Na'u）の河々に沿って行き，タウル（討浯舌児，Tau'ur）河を遡って渡り，大アウルクに（也客　阿兀舌魯黒圖舌児，yeke a'uruγ-tur）合流し来たれ。」と言って遣わした。［ジョチ・］カサルとともに（中合撒舌児魯河，Qasar-lu'a）ノヤンたち［の中］からジュルチェデイ（主舌児扯歹，Jürčedei），アルチ（阿勒赤，Alči），トルン（脱侖，Tolun），侍従三人をともに遣わした。カサルは北京城塞を投降させ，女真のブカヌを帰順させ，道にある城塞を降服させ，カサルはタウル河を遡って［帰り］来て，大アウルクに（也客　阿兀舌魯黒圖舌児，yeke a'uruγ-tur）下営しに来た。[24]

これは，1213年から翌年にかけての第二回金国遠征と，1215年の第三回遠征について，その内容を混淆した記事である。ここに見える大アウルクは，遠征の途上でナウ河（嫩江）の支流タウル河（洮児河）の上流に置かれたチンギス・カンの大本営にあたり，弟のジョチ・カサルとノヤンたちからなる左翼軍はそこから出軍して行ったものとみられる。

この大アウルクは，金国遠征事業における大本営であると同時に，攻撃軍を送り出す輜重陣営でもあった。とすれば，“大アウルク”に対する“小アウルク”の存在も推測することができよう。つまり，“小アウルク”とは，大アウルクから出軍した左翼軍などが各々従えていた輜重陣営である。

ところで，『元朝秘史』続集巻1・第257節【史料 E】にみえる次の記事は，一定の兵力を有するアウルクにおいて，それを管理する者が任命されたことを示している。

> 兎の年（己卯，1219），サルタウル（撒舌児塔兀勒，Sarta'ur）の人衆に，アライ［峠］を越えて（阿舌剌亦牙舌児，Arai-iyar），出馬するとき，チンギス・カンは妃［の中］からクラン（中忽闌，Qulan）妃を連れて征戦する時，弟達［の中］からオドチギン・ノヤンを（斡槐赤斤

---

24 額尔登泰 1980，pp.731－733；小澤 1989，pp.265－268；村上 1976，pp.164－169.

那顔泥，Odčigin-noyan-ni）アウルクに（阿兀舌魯黒突児，a'uruγ-dur）任じて出陣した。[25]

これは，いわゆるホラズム遠征の開始である。足かけ七年に及ぶこの遠征に際して，チンギス・カンが自らのアウルクを末弟のオドチギンに委ねて出馬したとあり，アウルクを管理する首領官に信頼の置ける人物が選ばれたことが示されている。ここでのアウルクは，漢語傍訳に“老營”，すなわち前述の“老小營”＝家族営に該当すると思しき語があてられおり，ケルレン河畔にあったカンのオルドに含まれる家族営をさすものと考えられる。チンギス・カンは，遠征に際してこのアウルクを随行させず，ただクラン妃だけを伴って出発した。これは何を意味するのだろうか。『元朝秘史』続集巻2・第271節【史料F】にみえる次の記事と併せて考察を進めたい。

また，オゴデイ・カアン（斡歌歹中合罕，Ögödei qahan）は兄チャガタイ（察阿歹，Ča'adai）に相談して遣るに，「…（中略）…私は，兄チャガタイがよしとされるならば，我らの父帝［チンギス・カン］がキタド（乞塔暘，Qitad）人衆のアルタン・カンを（阿勒壇罕泥，Altan qan-ni）果たさず放置した，いま，私はキタド人衆のもとに出馬したい。」と［言って］相談しに遣れば，兄チャガタイはよしとして，「何の差し支えがあろう。アウルクに（阿兀舌魯黒圖舌児，a'uruγ-tur）よき人を任じて出馬されよ。私はここから軍を出して送ろう。」と言って遣った。大オルドにオルダガル（斡勒荅中合舌児，Oldaγar）コルチを（中豁舌児赤宜，qorči-yi）任じて…（後略）[26]

ここに見えるアウルクも，前掲【史料E】と同様に“老營”という漢語傍訳が付されている。史料の内容も，オゴデイ・カアンが，兄チャガタイとともに金国遠征への決意を固める場面で，自らのアウルクを遠征に随行させず，ケシクのコルチ qorči（箭筒士）をつとめたオルダカル[27]という人物に委ねたという点で，【史料E】と似通っている。そして，両史料に見られる語としてのアウルクは，戦闘部隊の出征時に後方から移動してきて兵站活動を行う輜重陣営をさすのではなく，出征には参加せず本来の地に留まった大オルドをさしたものと考えられる。おそらく，実際の遠征には従来通り輜重陣営が随行したものと思われ，例えば【史料E】におけるクラン妃一行がそれに該当しよう。しかし，アウルクという語は，それをさすものとしては用いられず，大オルドをさしているのである。

最後に挙げた二史料，すなわち【史料E】と【史料F】は，【史料D】とともに，同書の中でも最後の部分にあたる「続集」に収められている。モンゴル族の統合の歴史を叙述した正集（巻1～巻10）と異なり，この「続集」は，もっぱらイェケ・モンゴル・ウルスの外征に関する記述にあてられている。続集を含めた『元朝秘史』の成立年代については諸説あるが，小澤重男氏は，正集は1228年に，続集の247節から273節までは1252年に，異なる作者の手によって書かれた，とする仮説を提起した[28]。もしも氏の説に従えば，続集における各種の用語――むろんアウルクも含めて――は，それ以前の正集とは異なった用い方がなされる可能性がある。つまり，続集が編まれたという1252年の時点で，アウルクに対する一般的な認識に変化が生じており，その

25 額尔登泰 1980，pp.755－756；小澤 1989，pp.339－346；村上 1976，pp.198－215.

26 額尔登泰 1980，p.805；小澤 1989，pp.448－450；村上 1976，p.314.

27 オルダカルは，オゴデイ・カアンの親征の際に留守としてオルドの管理に当たった人物として，ラシード『集史』の上でもその名前が確認できる［村上 1976，p.319注1］。

28 小澤 1994，pp.137－139.

結果，戦闘に随行する輜重陣営としてだけでなく，本拠地に置かれた大オルドをさす語としても用いられるようになったと見ることができるのである。つまり，アウルクという表現は，輜重陣営の意味で用いられた【史料 D】に加えて，新たな認識の変化あるいはアウルク自体の形態の変化によって，【史料 E】【史料 F】のように，遠征に随行しない本拠地の大オルドとしても用いられるようになったということである。

アウルク自体の形態の変化とは，それまで，単に兵士たちの家族を含み，必要に応じて兵站供給を行うだけだったアウルクが，イェケ・モンゴル・ウルスの発展とともに，規模が拡大し，組織化が進み，機能も高度化されていったことを意味する。

例えば，前掲【史料 B】は，チンギス・カンの即位の数年前，まだジャムカとの戦いを繰り返していた時代の記事である。この時期のアウルクは，ジュルキン族の奇襲にあって10名の死者が出る程度のきわめて小さな規模だったことがわかる。その後，仇敵を次々と倒して，1206年の即位が間近に迫った時期の記述が前掲【史料 C】であり，そこには，アウルクに隷属していたメルキト族の叛乱を鎮めたことが記され，護衛の機能が以前よりも増したことがうかがえる。前掲【史料 A】の頃になると，オルドやアウルクの規模は巨大化し，それを守るためのケブテウル kebte'ül が整備されたのである。同史料において，チンギス・カンが，ケブテウルをオルドから離して遠征に赴かせることを否定しているのも，オルドやアウルクを守るのは“容易ではない”，つまりそれだけ巨大化したという意味として受け取ることができる。そして，【史料 D】にみえる大アウルクは，金国遠征における大本営の輜重部隊をさし，チンギス・カンとともに移動しながら，全軍の兵站供給を総領するまでになり，おそらくそこから出軍する各部隊にも小アウルクが随行していた。最後の【史料 E】【史料 F】では，チンギス・カンとオゴデイ・カアンが，アウルクを信頼の置ける者に委ねてそれぞれ遠征に出発した。それは，すべての后妃や諸子を含む全アウルク，つまり大オルドそのものを率いて遠征に向かうには及ばなかったという意味である。つまり，両者ともその遠征に必要な規模の輜重陣営を随行させていたはずであり，そのアウルクは【史料 D】の大アウルクにあたるものだったといえる。

以上，主として『元朝秘史』の記述をもとに，奥魯の原型といえるアウルク a'uruq の機能について探ってきた。それは，イェケ・モンゴル・ウルスが中国に侵入する以前の兵站供給の実態と深く関わっており，考察の結果，アウルクには多様な形態が存在し，時代の経過に対応して，アウルクの規模が拡大し，組織化が進んだことや，遠征に随行しない本拠地の大オルドを指すようにもなったことを漠然とつかむことができた。

しかし，本章で用いた史料は『元朝秘史』に限られており，しかもアウルクやその兵站活動に関する記事が非常に少ないという制約もあった。先述のように，そもそもチンギス・カン時代について詳細な記述が得られる史料は皆無に等しいこともあって，当時の軍制や戦闘の実態を具体的に把握することはきわめて困難である。とはいえ，アウルクとその兵站活動について，別の角度から検証することによって，少しでも正確な実像を結ぶことができるかもしれない。

そこで次章では，ラシード『集史』に代表されるペルシア語史料にも目を向け，フレグ・ウルスを中心とした西方の視点からアウルクの実態に迫ることによって，モンゴル軍における兵站供給活動の特質を考察しようと思う。

4.『集史』記載のアウルク

本章では，『集史』[29]に見られる兵站活動に関連した記述をできるだけ網羅的に拾いつつ，その内容を吟味することによって，イェケ・モンゴル・ウルスおよび西方のフレグ・ウルスなどにおける兵站供給の実態を検証していきたい。

初期のモンゴル軍の大部分においては，軍団に必要な軍糧が，軍人の家族や畜群で構成される後方の輜重軍アウルクから調達されていた。モンゴル軍人は普段の遊牧生活を維持したまま遠征に赴いていたため，軍糧を軍団外部からの補給に頼る必要はなく，その一方で，軍人たちはモンゴル軍団の一員として作戦行動に携わり，政府に対してさまざまな義務を負っていた[30]。モンゴル軍人たちは，ウルスに属して行動しながらも，軍糧の調達は自らの責任で行うのが原則だったのである。

軍糧を調達する後方輜重陣営アウルクに関する記述は，『集史』の各所に見出され，ほとんどの場合，アグルーク“aghrūq”とその複数形“aghrūq-hā”の形であらわれる。それらをざっと眺めると，前章で数例挙げた『元朝秘史』中の記事と同様，移動可能な後方の輜重陣営であったことがわかる。例えば，『集史』テグデル（スルタンアフマド）紀には次のような記事がみえる。なお，本稿では，便宜上，すべての“アグルーク”を“アウルク”と表記する。

> 翌日，レイ（Rei）から使臣（īlchī）が到着して［報告することには］，アリーナーク（‘Alīnāq）が家人たち（nūkarān）と軍隊とともにカズヴィーン（Qazvīn）のあたりに到達した。アルグン（Arghūn）はウライ・テムル（Ulayi-Temūr）を初めに派遣して，後にイームクジーン・ノヤン（Īmkjīn-noyān）を，自分自身はタミシャ（Tammisha）への道に出発し，シーシュ・バクシ（Shīsh-bakhsh）をアウルク（aghrūq-hā）の長にして残した。683年第2月8日（1284年4月26日），アフマド（Aḥmad）は八つの万人隊とともにビールスヴァール

---

29 ラシード『集史』の記事は次の各校訂本に拠った。Rashīd/Jahn, *Geschichte Ġāzān-Ḫān's aus dem Ta'rīḫ-i Mubārak-i-Ġāzānī des Rašīd al-Dīn Fadlallāh b. 'Imād al-Daula Abūl-Ḫair,* hrsg. von K.Jahn, London, 1940. Rashīd/Али-заде, Фазлуллах Рашид-ад-дин, *Джами'-ат-таварих,* том III, Составитель научно-критического текста на персидском языке Абдул-керим Али Оглы Али-заде, Баку, 1957. Rashīd/Quatremère, Raschid-eldin, *Histoire des Mongols de la Perse*, tr. et ed. par E.Quatremère, Amsterdam, 1968. Rashīd/Blochet, *Djami el-Tévarikh par Fadl Allah Rashid ed-Din*, Tome II, ed. E. Blochet, Leyden & London, 1911. Rashīd/Boyle, *The Successors of Genghis Khan*, J.A.Boyle, N.Y.-London, 1971.

30 『集史』ガザン・カン紀の第24節「［ガザン・カンは］各地方（vilāyat）のいくつかの場所（mavāẓi‘）をモンゴル軍に与えてイクター（iqṭā‘）とした」にみえる次の記事から，初期のモンゴル軍人は，政府から軍糧（taghār）などの配給を受けず，自らそれを調達していたことが推察できる。

> 以前，我らの善き父たちの時代にモンゴルの人々（ūlūs-i mughūl）は，現在すべて廃止が命じられた家畜の現物税（qūpchūr-i mavāshī），大駅站（yāmhā-yi buzurg）の課税，厳しい法（yāsāq）の負担への忍耐，軍役（qalānāt）といったさまざまな種類の要求や面倒なことが求められた。彼らの大部分は倉庫から軍糧（taghār）［を持ち出すこと］が禁じられた。そのような報酬の義務にもかかわらず，まっすぐに力を捧げ（kūch dāda），奉仕して，反乱することもなく，遠い旅の苦労に耐え，［それでも］満足していた。疑うことなく極限までモンゴル軍人に富や税収（ḥāṣil）が金銭的に増えることはなかった。（Rashīd/Jahn, pp.304－305, Rashīd/Али-заде, p.512.）

（Bīlsvār）からムーガーン（Mūghān）へ出発した。同月13日（5月1日），使臣が到着して，アルグンの軍隊がターリカーン（Ṭāliqān）のあたりから現れたと［報告した］。アフマドはアルダビール（Ardabīl）の付近からアリーナークの子クールミシュ（Qūrmish）を父親のもとに送って命じた。もしもお前たち［の兵力］が［敵より］大きければ戦い，そうでなければ我々の到着まで忍耐を示せ，と。彼（アフマド）はアブーカーン（Abūkān）にアウルク（aghrūq）の長として残し，第2月18日（5月6日）にアルダビールから出発した。[31]

この記事は，アルグン Arghun（在位1284～1291）とアフマド（テグデル Tegüder，在位1281～1284）がフレグ・ウルスのカン位をめぐって争った際，両軍が牽制しあいながら行軍している場面である。両軍ともにアウルクを伴っており，アルグンはシーシュ・バクシなる人物に，テグデルはアブーカーンなる人物にそれぞれアウルクの管理を委ねつつ，アルグンとテグデルはそれぞれ戦闘部隊を率いて行軍していることが分かる。

前述のように，アウルクを含めたモンゴル軍の陣形には，周知のような左翼・中軍・右翼からなる「横の区分」のほか，先鋒・中軍・輜重軍という三者を基本とする「縦の区分」が存在した。上記の記事からはその存在を伺うことができる。すなわち，アルグン軍団におけるウライ・テムルの軍が先鋒，エムゲチェン・ナヤンが次鋒，アルグン本人が中軍，そしてシシュ・バクシが輜重軍すなわちアウルクを担ったのである。このほかの『集史』の諸史料においても，遠征の場面でこうした「縦の区分」が存在することを示す記述が散見される[32]。

本軍が戦闘に敗れた場合，アウルクも略奪の対象となるのが常であった。ガザン・カン紀に，

何年かしてまた，君主――彼の王位が永遠ならんことを――の父方の甥，ジョチ，チャガタイ，オゴデイの一族の間に，不和と争いがあった。彼らの軍隊はいつも互いにアウルク（aghrūqhā-yi）を略奪しあい，子供を互いに捕らえて奪いあい，商人に売っていた。また，多くの人が貧困のために自分の子供たちを売っていた。[33]

とある通りである。前章でもみたように，アウルクは戦士の家族や家畜・隷属民などを内包しており，それらを保護・管理する任務を負った戦士がいたものの，戦闘の進行いかんによっては攻撃を受けて破壊や略奪の対象とされるケースも少なくなかった[34]。チャガタイ・カン紀には，アリク・ブケがフレグ・ウルスのアルグ・カンと衝突した際に，アルグ・カンのアウルクを略奪したという次の記述が見られる。

その知らせがアリク・ブケ（Alīq-būkā）のもとに着いたとき，彼はアルグ（Alghū）に対し軍隊を率いて戦った。アリク・ブケは二度敗れて，三度目にアルグが敗走した。彼はブカラ（Bkhārā）とサマルカンド（Samarqand）に到着し，富裕者たちから財産（māl）と武器と駄畜を取り，自分の軍隊に与えた。アリク・ブケは彼のアウルク（aghrūqha）から略奪し

31 Rashīd/Али-заде, p. 180.

32 Rashīd/Blochet, p. 290, Rashīd/Boyle, p. 209; Rashīd/Али-заде, p. 52, Rashīd/Quatremère, p. 264; Rashīd/Али-заде, p. 192.

33 Rashīd/Али-заде, p. 519, Rashīd/Jahn, p. 311.

34 Rashīd/Blochet, p. 173, Rashīd/Boyle, pp. 141－142; Rashīd/Blochet, p. 188, Rashīd/Boyle, p. 151; Rashīd/Blochet, pp. 439－440, Rashīd/Boyle, p. 267; Rashīd/Blochet, p. 443, Rashīd/Boyle, p. 269.

た。それから一年後，彼は立ち去り，［クビライ・］カアンの軍隊を撃退するためにその付近から戻って行った。[35]

ここではアウルクが複数形“aghruq-ha”をなしていることから，アルク・ブケによる略奪の犠牲になったアルグ・カンのアウルクが，数ヶ所に分散していた可能性を示している。また，ブカラやサマルカンドの“富裕者”のみならず，アウルクに保管されているさまざまなものが略奪の対象となったことが示されている。

こうした略奪を免れるため，アウルクを安全な場所に置いてから軍事行動に移る様子を示したガザン・カン紀中の記事もみられる。

703年第8月の末（1304年4月初），［ガザン・カンは］オルジェイトゥ・ブイヌーク（Ūljāytū-būynūq）と名付けられたフランムレン河（Hūlan-mūrān）の牧地から，后妃たち（khavātīn）とアウルク（aghrūqhā）を，イェケ・マンズィリ・サライ（Yeke-manzili-sarāy?）への道があるジューク（Jūq）砦のあたりに残して，ただ国家の重臣たち（‘arkān-i dawlat）と名門の者たち（a‘yān-i ḥaḍrat）とともにミラーク（Mirāq）の方へ出発した。[36]

ガザン・カンが親衛軍を従えて出軍する際に，アウルクを途中の砦に置き，本格的な輜重を備えることなく出発したというのである。この史料で注目されるのは，“后妃”と“アウルク”を並列させて叙述している点である。『集史』において，カンのアウルクが后妃とともにあったことを示す記述は多く[37]，同様に，“家族”と“アウルク”が併記されるケースも見られる[38]。つまり，アウルクの軍事的な機能に注目すれば，それは「後方の輜重陣営」であるが，本質的には，『元朝秘史』の漢語傍訳にも見られたような“老小營”すなわち家族営とみなされていたのである。

同様に，トゥルイ紀のトゥルイの死去に関する記事の中にもアウルクの存在に言及し，それを「自らのゲル」という程度の軽い意味合いで用いている事例がみられる。

［トゥルイ・カンは］話し終えると，シャーマンたち（qāmān）が呪文でカアンの病を洗った椀の水を手に取り，さらに飲んだ。神（rabbāni）の力で（オゴデイ・）カアンは回復し，トゥルイ・カンはいとまごいをして自分のアウルク（ūghrūq）に向かっていった。その途中で，モガーイ（Mughāyi，蛇）の年，すなわちヒジュラ暦630年の月暦にあたる蛇の年（1233）に病気になって死去した[39]。

これは，金国遠征の最中，オゴデイ・カアンの軍隊がシラデク（竜虎台）に屯営したとき，トゥルイが，病にかかったオゴデイの身代わりとして，シャーマンが祈祷した水を飲んで死去したという一節である[40]。この記事におけるトゥルイのアウルクは，「トゥルイが寝所としているゲ

---

35 Rashīd/Blochet, p. 188, Rashīd/Boyle, p. 151.

36 Rashīd/Али-заде, p. 366, Rashīd/Jahn, p. 158.

37 Rashīd/Blochet, pp. 587－589, Rashīd/Boyle, p. 323; Rashīd/Али-заде, p. 186; Rashīd/Али-заде, p. 338, Rashīd/Jahn, p. 130; Rashīd/Али-заде, p. 352, Rashīd/Jahn, p. 143; Rashīd/Али-заде, p. 353, Rashīd/Jahn, p. 144; Rashīd/Али-заде, p. 358, Rashīd/Jahn, p. 149; Rashīd/Али-заде, p. 367, Rash（d/Jahn, p. 159.

38 Rashīd/Али-заде, p. 9, Rashīd/Quatremere, p. 100; Rashīd/Али-заде, p. 115; Rashīd/Али-заде, p. 133.

39 Rashīd/Blochet, p. 221, Rashīd/Boyle, pp. 167－168.

ル」というほどの意味で用いられており，「アウルク」という語が，必ずしも「後方の輜重陣営」として固定的に用いられていたわけではないことがわかる。前章でとりあげた『元朝秘史』中の記事にも，アウルクを家族集団として認識する例があったように，それは「家族を内包する集団」と考えられていたのである。

次のように，アウルクを一般の軍隊と区別して記す場合があったのも，それが軍事集団ではなく，家族からなる非戦闘集団とみなされていた証左かもしれない。例えば，ガザン・カン紀に，

> ［ガザン・カンは］数日してから前に向かって行った。［ガザン・カンが］ダヴィール（Davir）に滞在されたとき，ナウルーズ（Naurūz）が服従して加わった。アウルク（aghrūq-hā）と大部分の軍隊とすでにガイハトゥ（Kaikhātu）のもとから来ていた諸王スケ（Sūkā）が，マーザンダラーン（Māzandarān）の方にいたとき，［ガザン・カンは］神聖な判断でアスタラバード（Astarābād）のスルタン，ダヴィーン（Davīn）のもとへ進み，その場所からイラク（'Irāq）とアゼルバイジャン（Adharbaijān）に出立することを決意した。[41]

とある記事は，アウルクを他の「軍隊」とは別に記している点で，これを軍隊とはみなさず，家族集団として見ているかのようである[42]。しかし，アウルクはカンをはじめ戦士たちが休息を求めて赴く場所であり，それが兵站供給の機能を担っていたという位置づけに変わりはない。

さて，ここで，フレグ・カン Hülegü Khān（在位1260～1265）のアウルクの動向について具体的に検証しながら，その特質を探ってみたいと思う。まず，フレグ・カン紀には次のような記事がみえる。

> フレグ・カン（Hūlākū-khān）は，650年12月にあたる丑の年の末（1253年２月頃）に，自分のオルドに到着し，651年第12月にあたる寅の年・豹の年の秋に，兄（モンケ・カアン）の命令に従って，アウルク（aghrūqhā）をそこに残した後に，大軍とともにこの国（diyār）に向かって出発した。[43]

これは，モンケ・カアンの命でイランへの西征に出発するフレグが，本拠地モンゴルを出発するに際して，自らのアウルクをモンケのもとに預けたとするものである。この記事を，同じフレグ・カン紀にみえる次の記事と考え併せると，フレグのアウルクは一つだけではなく，モンケに託されたアウルクの他に，西征に随行したアウルクも存在したことがわかる。

> ［フレグ・カンの］第二子ジュムクル（J̌ūmqūr）は，アバカ・カン（Ābāqā-khān）の誕生から一ヶ月後，グユク・ハトン（Kūyik-khātun）からモンゴル地方で生まれた。フレグ・カン（Hūlākū-khān）は，イラン（Īrān）の地に出発したとき，彼を自分のオルドとともに，モンケ・カアン（Monkkū-qaān）に仕えさせ，残した。連れてきた別のアウルク（aghrū-qhā）はトルキスタン（Turkistān）地方のアリマリク（Almālīq）付近に解き放った。アリ

---

40 同様の記事が『元朝秘史』や『元史』にも見られる。『元朝秘史』続集巻２・第272節［額尔登泰1980, pp. 805－812］。『元史』巻115睿宗伝・壬辰六月。

41 Rashīd/Али-заде, p. 286, Rashīd/Jahn, p. 50.

42 その他，Rashīd/Али-заде, p. 180にも同様の記述が見られる。

43 Rashīd/Али-заде, p. 24, Rashīd/Quatremere, p. 144.

ク・ブケ（Arīgh-būkā）がクビライ・カアン（Qūbīlāy-qaān）と対立したとき，ジュムクルはモンケ・カアンのオルドにいて，アリク・ブケはそこにいて，クビライ・カアンは遠方にいたので，アリク・ブケの側に留まって彼を妨害しなければならなかった。その理由から，［ジュムクルは，］アリク・ブケのためにクビライ・カアンの軍隊と戦った。アリク・ブケがアルグと戦って彼を破ったあと，［ジュムクルは］病気を口実に，サマルカンド付近でアリク・ブケから離反した。なぜなら，フレグ・カンは，彼がクビライ・カアンと対立していることを快く思わず，後退［の姿勢］をみせるまで伝言を送ったからである。［ジュムクルは］そこからクトイ妃（Qūtūi-khātūn）に合流し，出発して父に仕えようとした。［しかし］その途上で亡くなった。このような記述は［他の］箇所であらわれるだろう。[44]

これによれば，モンケの元に預けられたフレグのアウルクは，フレグの第二子ジュムクルが長じて受け継いだものの，モンケの死後，クビライとアリク・ブケの内紛が始まると，その渦中でジュムクルは微妙な立場にたたされたことがわかる。また，ジュムクルがクビライ・カアンの軍隊と戦ったとあることから，彼自身にある程度の戦力を備えられ，したがってそのアウルクにも一定の軍勢が随行していたことが推定できる。とはいえ，容易にアリク・ブケ陣営から離脱できるほどには十分な戦力を持ちあわせてはいなかったようである。

ジュムクルのこのアウルクは最終的にフレグの次代にあたるアバカ・カン Abaqa Khān（在位1265～1281）のもとに帰還を果たした。そのことが，アバカ・カン紀にみえる「マスウド・ベク（Mas'ud-bek）がアバカ・カンのもとに参上したこと，また，クトゥイ妃（Qūtuyi-khātūn）とそこに残されていたフレグ・カンのアウルク（aghrūq）の到着」の中の記事から判明する[45]。

アバカ・カンはホラサーン（Khorāsān）へ出発され，サラクス（Sarakhs）に行き，冬にはマーザンダラーン（Māzandarān）とその付近に冬営した。フレグ・カンのアウルクが着いたとの知らせが来た。彼らを出迎えた。カブード・ジャーメ（Kabūd-jāme）の付近で，クトイ妃が二人の息子テクシーン（Tekshīn）とテグデル（Tekūdār）とともに，ジュムクルの子供たちシューシュカーブ（Jūshkāb）とキーンクシュ（Kīnkshū），タラカイ（Ṭaraqāyi）の子バイドゥ（Bāyidū）と，アバカ・カンの母親イスンジーン妃（Yisūnjīn-khātūn）が着いた。彼らの話はこのようなものだった。フレグ・カンはイランの地を征服したとき，自分のアウルク（aghrūq）をモンケ・カアンの許に残した。アリク・ブケの内訌が起きたとき，それ（アウルク）があった場所は仲間のジュムクル［のところ］だった。彼はアルグとの戦争に敗れたとき，出発して（アバカ・）カンのために奉仕してたくわえ，ジュムクルは病気と［その］治療を口実に対立［の姿勢］を示し，その付近に滞在した。知らせがフレグ・カンに着いたとき，［6］62年（1264年），アバタイ・ノヤン（Ābātāyi-nūyān）を派遣してジュムクルとアウルク（aghrūq）を呼び寄せた。ジュムクルは病気のために途中で死去した。アバタイ・ノヤンは彼らをサマルカンドの付近に残して，［自分は］フレグ・カンの許に帰って状況を報告した。［フレグ・カンは］彼を罪し，八十杖打って仰った。「お前は途中でそれ（アウルク）をよく守らなかった。お前は飲食や監督，妃たちと［の関係］，浪費したこ

44 Rashīd/Али-заде, p. 9, Rashīd/Quatremere, pp. 98/100.

45 ジュムクルに託されたアウルクの動向については，その概略が松田孝一氏により紹介されている［松田1980, pp. 44－46］。

と，すべてにおいて。」その時，既述のインド人が彼らを道案内し，よく出発しようとして外で連れてきて，アム（Āmūyih）河を渡ってきた。666年第5月19日（1268年2月7日）カヌードジャーメ（Kanūdjāme）の付近に参上した。［アバカ・カンは］彼を労い，功臣（tarkhān）に命じた。クトイ妃はフレグ・カンがバドカシャーン（Badkhashān）で死去したという知らせを聞き，盲目になったようにひどく泣いた。[46]

上記のアウルクは，フレグの西征の間，フレグ本軍と合流することはまったくなかったようである。その点で，このアウルクは，輜重陣営ではなく，本拠地のモンゴルに残されたフレグの家族集団とみなすべきである。ただし，あちこち彷徨した末にアバカ・カンのもとにたどり着いたことからみて，移動式の帳幕を備え多数の家畜たちを伴った遊牧集団であったことは容易に想像できる。

上のような，モンケのもとに残されたアウルクに対し，フレグの西征に随行したアウルク[47]はその後どうなったのだろうか。

フレグ・カンはハマダーン（Hamadān）付近のゼキー（Zekī?）草原にアウルク（aghrūq-ha）を残して，カヤーク・ノヤン（Qayāq-noyān?）を［アウルクの］長に任命した。655年第1月の初め（1257年1月）[48]，［フレグ・カンは］モンゴル人のいわゆるコル（qol）という中心の軍隊とともに，キルマーン・シャーハーン（Kirmān-shāhān）とフルワーン（ḥulwān）の道へ出発した。[49]

これはすでにアム河を越えてカスピ海の南のハマダーン近辺に達し，アッバース朝の都バグダードに迫ろうとしていた時の記述である。その翌年，

フレグ・カンはアウルク（aghrūq）をカーンキーン（khānqīn）に解き放って出発した。既述の年（656年）の第1月15日（1258年1月22日）と一致する［陰暦の］巳年の12月17日に出発して，東の端に下りた。[50]

とあるように，フレグの西征軍には常にアウルクが随行していた。さらにそののち，

フレグ・カンは，［656年］第4月11日（1258年4月18日）水曜日，ハマダーン（Hamadān）とシヤー・クー（Siyāh-kūh）の境界のアウルク（aghrūq）に着いて，旅からおりた。健康を害した。また健康になった。[51]

とあるように，アウルクが，軍の本隊から少し離れて遅れながら着いて来ていることや，フレグ・カンとその軍は時折アウルクと合流し，そこに逗留して旅と戦の疲れを癒していたことが窺

46 Rashīd/Али-заде, pp. 105－106.

47 蓮見節氏は，下の二史料を引用し，フレグの進軍状況とアウルクの所在について分析している［蓮見 1985, pp. 5－7］。

48 ドーソンは，フレグのハマダーン出発の年月を“六五五年ズルカーダ月・一二五七年十一月中ごろ”とし［ドーソン 1973, p. 227］，蓮見節氏もそれに従っている［蓮見 1985, p. 6］。

49 Rashīd/Али-заде, p. 52, Rashīd/Quatremere, p. 264.

50 Rashīd/Али-заде, p. 55, Rashīd/Quatremere, p. 280.

51 Rashīd/Али-заде, pp. 63－64, Rashīd/Quatremere, p. 312.

い知れる。

以上の考察から，ラシード『集史』において，アウルクがどのような存在として認識されていたのか判明した。まず，それ自体が遊牧集団の延長上にあるため，移動可能な陣営の形式をとっていた。そこには后妃や子らを含む家族が居住し，その戦闘力は限定されていたものの，遠征に随行する場合には輜重陣営としての役割を持ち，随行しない場合は本拠地で従来通りの遊牧生活を営んでいた。そして，戦闘の結果によっては略奪の対象となることもあったのである。

『集史』は，『元朝秘史』に比べて成立年代が遅く，また，『集史』の上では確認できた最も古いアウルクはフレグの西征期のものだったこともあり，そこには時代の経過に応じたアウルクの形態の変化の様子を見出すことはできなかった。しかし，『集史』記載のアウルクから読みとれる内容は，いずれも『元朝秘史』記載のアウルクと共通しているものといえよう。

5．おわりに

イェケ・モンゴル・ウルスの軍制は，チンギス・カンが権力を確立していく過程で形成された政治的・軍事的組織である「千戸制」や侍衛軍団ケシクなどによって特徴づけられる。兵站供給活動についていえば，蓮見節氏が指摘したモンゴル遠征軍の「縦の区分」すなわち“コル qol，アルギンチ alginči，アウルク a'uruq”のうち，後軍（輜重軍）にあたるアウルクがその任務を担っていた。アウルクの実態を，『元朝秘史』やラシード『集史』など，イェケ・モンゴル・ウルスの初期の事象について比較的詳しく記す史料をもとに再構成すると，以下のようにまとめられよう。

アウルクは，遊牧集団の延長にあり，軍人の家族や畜群を中心に構成され，戦闘で疲労・負傷した軍人たちに十分な食事を与え，介護する後方の輜重陣営としての役割を担っていた。遠征の際には，本軍とは若干の距離をおいて後からついてくる移動可能な陣営であり，戦闘の際には本隊の後方に陣を構え，夜などは本隊と合流して軍人の休養等に供した。本軍が戦闘に敗れた場合，アウルクも略奪の対象となるのが常であった。逆に，戦争に勝利して捕虜を得た場合，彼らはアウルクに留められて隷属民となり，おそらく遊牧生産に携わって実質的に兵站活動の一翼を担うことになった。時代の経過とともに，アウルクの中には規模は拡大し組織化の進んだものもあらわれ，時には“大アウルク”としてカンの大本営を指すこともあった。

また，『元朝秘史』や『集史』の記事をみると，輜重陣営アウルクとしてだけでなく，「家族を内包する集団」という意味が付加されているケースも少なくない。例えば，フレグ・カンのアウルクをとってみても，西征に随行した輜重陣営がアウルクと呼ばれていた一方，本拠地のモンゴルに残された家族集団もアウルクと呼ばれており，書き手のラシードをはじめ当時のペルシアの人々は，アウルクをカンの家族集団としても認識していたことを窺い知ることができる。より厳密にいえば，“后妃とアウルク”“家族とアウルク”という表現から想定できるように，アウルクは「家族集団に付随するもの」という意味合いを持っていた。また，『元朝秘史』の記載からは，時代の経過とともに，輜重陣営としてのアウルクに加え，遠征に随行しない本拠地の家族集団“大オルド”を指すようにもなった点を読みとることができた。

本稿で明らかにしたアウルクに関する一側面だけでなく，さらに多様な諸点について，多言語史料を活用した研究を進めることによって，イェケ・モンゴル・ウルスの軍制に関する旧来の単純化された視点を乗り越えることができよう。そして，その蓄積のもとに大元ウルスの軍制に関

する研究をいっそう推し進めていかなければならないのである。

引用文献目録　Bibliography

岩村　忍

1942　「元朝奥魯考」『北亜細亜学報』1.

1963　『元朝秘史』〈中公新書〉中央公論社.

1968　「兵員の補充と物資の補給」『モンゴル社会経済史の研究』京都大学人文科学研究所，pp.245－262.

大葉　昇一

1980　「元朝怯薛管轄下の怯憐口」『早稲田大学大学院文学研究科紀要　別冊』6.

小澤　重男

1986　『元朝秘史全釈（下）』風間書房.

1988　『元朝秘史全釈続攷（中）』風間書房.

1989　『元朝秘史全釈続攷（下）』風間書房.

1994　『元朝秘史』（岩波新書）岩波書店.

1997　『元朝秘史（上・下）』（岩波文庫），岩波書店.

賈　敬顔

1988　「奥魯制度与遊牧民族」『中央民族学院学報』1988－6.

額尓登泰

1980　『蒙古秘史　校勘本』内蒙古人民出版社.

片山　共夫

1977　「元朝四怯薛の輪番制度」『九州大学東洋史論集』6.

1980a　「元朝怯薛出身者の家柄について」『九州大学東洋史論集』8.

1980b　「怯薛と元朝官僚制」『史学雑誌』89－12.

1982　「元朝の昔宝赤について —怯薛の二重構造を中心として—」『九州大学東洋史論集』10.

1987a　「元朝の玉典赤・八剌哈赤について」『モンゴル研究』18.

1987b　「元朝怯薛の職掌について（その一）」『日野開三郎博士頌寿記念論集　中国社会・制度・文化史の諸問題』中国書店，pp.554－576.

加藤　和秀

1990　「モンゴル支配下の中央アジア定住社会 —ワクフ文書の分析を中心に—」『イスラムの都市性研究報告』45，東京大学東洋文化研究所.

蔡　美彪

1955　『元代白話碑集録』科学出版社.

志茂　碩敏

1995　『モンゴル帝国史研究序説』東京大学出版会.

杉山　正明

1978　「モンゴル帝国の原像 —チンギス・カンの一族分封をめぐって—」『東洋史研究』37－1.

ドーソン（佐口　透訳註）

1973　『モンゴル帝国史　4』〈東洋文庫〉平凡社.

野上　義教

1971　「氏族制社会とチンギス・ハンの千戸制」『東洋史苑』4.

蓮見　節

1985　「モンゴル軍の移動と a'uruq について（上）」『モンゴル研究』16.

1987a　「モンゴル軍の移動と a'uruq について（下）」『モンゴル研究』17.

1987b　「元代兵制史上における『国人』と『諸部族』について」『中央大学 大学院研究年報』16－Ⅳ.

1990　「一二－一三世紀のモンゴル騎馬軍団の基本構造について —軍事形態としての küriyen—」『中央大学人文研紀要』11.

本田　実信
1991/1953　「チンギス・ハンの千戸制」『モンゴル時代史研究』東京大学出版会，pp.17－40，（初収：「チンギス・ハンの千戸 —元朝秘史とラシード集史との比較を通じて—」『史学雑誌』62－6，1953）.
1991/1961　「チンギス・ハンの軍制と部族制」『モンゴル時代史研究』東京大学出版会，pp.41－52，（初収：「チンギス・ハンの軍制と部族制度」『歴史教育』9－7，1961）.
真杉　慶夫
1970　「怯薛制度について」『社会文化史学』6.
松田　孝一
1980　「フラグ家の東方領」『東洋史研究』39－1.
村上　正二
1970　『モンゴル秘史　チンギス・カン物語（1）』（東洋文庫），平凡社.
1972　『モンゴル秘史　チンギス・カン物語（2）』（東洋文庫），平凡社.
1976　『モンゴル秘史　チンギス・カン物語（3）』（東洋文庫），平凡社.
1993/1943　「元朝兵制史上における奥魯の制度」『モンゴル帝国史研究』風間書房，pp.97－138，（初収：『東洋学報』30－3，1943）.
1993/1951　「チンギス汗帝国成立の過程」『モンゴル帝国史研究』風間書房，pp.139－172，（初収：『歴史学研究』154，1951）.
護　雅夫
1952a　「Nökür 考 —『チンギス汗國家』形成期における—」『史学雑誌』61－8.
1952b　「Nökür 考序説 —主として主従関係成立の事情について—」『東方学』5.
矢澤　知行
1996　「奥魯制の展開とその意義 —大元ウルスの漢地支配—」『アジア・アフリカ歴史社会研究』創刊号.
箭内　亙
1930/1916a　「元朝怯薛考」『蒙古史研究』刀江書院，pp.211－262，（初収：『東洋学報』6－3，1916）.
吉田　順一
1969　「クリエン考」『古代学』16－1.
1981　「モンゴル族の遊牧と狩猟 —十一世紀～十三世紀の時代—」『東洋史研究』40－3.
1982　「モンゴルの遊牧における移動の理由と種類について」『早稲田大学大学院文学研究科紀要』28.
1984　「モンゴルの遊牧 —移動の問題を中心に—」『月刊百科』262.
Pelliot, P.
1930　Les mots Mongols dans le 高麗史 Korye sǎ, *Journal Asiatique* cc xvii.
Дамдинсурэн, Ц.
1975　*Монголын Нууч Товчоо*, Улаанбаатар.

（2001年5月24日受理）